

COVID-19と地域医療構想

院長 林 田 良 三

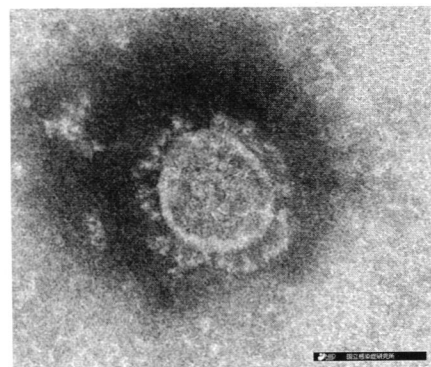
昨年、12月中国武漢に端を発したCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)は瞬く間に世界中に拡大し、医療だけでなく社会活動、経済活動にも著しい混乱と損失をもたらしています。9月22日現在、世界の累積感染者数は3千万人を越え、死者数は100万人に迫っています。感染収束の決め手となるワクチンやCOVID-19治療薬の開発が世界中の研究所や企業で血眼になって進められています。しかし、実用化され一般市民へのワクチン接種や新薬投与が可能となるにはまだ数ヶ月から1年程度の時間がかかりそうです。COVID-19の発生から約10か月、先行きの見えない不安や閉塞感に私達は未だに支配されています。

このような地球規模の新興感染症パンデミックが現実のものになることを多くの人が予想だにしていなかったかもしれません。しかし、歴史をひもといてみると天然痘、ペスト、スペイン風邪など人類の存続を脅かす感染症の拡大は幾度となく繰り返されています。その度に人類は計り知れないほどの犠牲を払い、それを乗り越えてきました。そして、人知では制御できない感染症との戦いはその後の人々の営みを大きく変化させるほどの影響力がありました。科学が格段に進歩した現代にあっても未知なる感染症の前では無力で人類が綿々として作り上げてきた高度社会はズタズタに切りさかれてしまいました。都市封鎖やソーシャルディスタンス、手洗い、マスクといった旧態依然とした感染防御の方法しか持ち合わせていなかったことも身をもって知りました。もちろん、現代医学の進歩により新たなワクチンや治療薬が開発され、

昔とは異なったやり方で新型コロナウイルス感染症は収束していくと思います。しかし、新たな未知の感染症はいずれまた、人類を襲ってくると考えられています。私達はそれにどう備えればいいのでしょうか。

現在、すぐれた日本の医療制度を超高齢社会においても維持していくために地域医療構想と呼ばれる医療制度改革が地域単位で進んでいます。無駄な病床を削減し、地域の実情に即した効率的な医療介護提供体制を構築しようというものです。高齢化の進行に伴い右肩上がりに増え続ける医療費、介護費は国家財政を破綻させるとまで考えられており、制度改革の考え方自体は理にかなっています。しかし、地域医療構想の議論のなかに今回のような感染症パンデミックや年々激甚化する災害時の医療に関する議論は全く欠落していました。地域単位での効率化された医療提供体制では感染症パンデミック、災害医療には対応できないことを痛感しました。また、縦割り型の行政制度も広域にまたがる感染症や災害時医療においては弊害となることも強く感じました。緊急時により広域に人や物が流動的に動かせるような医療提供体制の仕組み作りが必要だと考えています。

COVID-19が世界的に蔓延する渦中において、私たちは大きな転換点にたたされているとの思いを強めています。感染症と人類の歴史は今まさに繰り返されています。



出典：国立感染症研究所

